

【一般演題4】 第17席 「中国における『内經』音韻研究の歴史とその理論の適用について」

京都 東郷 俊宏

古来より音韻学は訓詁学、文字学とならび所謂《小学》の一翼を担い、古文献の解釈や成立年代の考証を行う上で、必須かつ基礎的な学として重んじられてきた。

日本では渋江抽斎、森枳園、岡田静安等のごく少数の例を除き、医經中の音韻に着目した者は稀である。しかし中国においては音韻学、なかでも『詩經』三百篇の押韻状況の分析に始まった上古音研究は、清朝考証学の開山といわれる顧炎武（1613－1682）によってその礎が築かれて以来、江永、段玉裁（1735－1815）、王念孫（1744－1832）、江有誥（？－1851）等によってひきつがれ、『内經』は古音研究の最良のテキストのひとつとして常に高い地位を得てきた。即ち、散文で書かれた『内經』に韻の相押を積極的に認めてきているわけだが、押韻分析の方法論はこれらの学者の間でも決して一様であったわけではない。本題では、清代における『内經』音韻研究の歴史を概観しつつ、それらが『内經語言研究』の著者、錢超塵など現代の研究者に与えた影響、また今後の『内經』音韻研究の展望について検討していきたい。